



 レシピ#008

R3.9.3

発問をきっかけに子どもたちの「考える」が始まる



〔安達地区〕
中学校 国語科の授業より

授業のワンシーン



中学3年生の、石垣りんさんの詩「挨拶—原爆の写真によせて」の学習です。Aさんが、「最後の『やすらかに 美しく 油断していた。』ってあるんだけど『油断していた』という言葉が、『やすらか』とか『美しく』とぴったりこない。なんだか違和感があるなと思いました。」という感想を述べました。授業者が「みんなは、自分だったら、どんな言葉が合うと思う？」と投げかけました。「たしかに。私だったら・・・」

「自分だったら、『生きていた』という言葉を使います。どうしてかというところ・・・」子どもたちは、それぞれに理由を述べながら、考えを出し合っていました。「別の言葉でもいいかもしれない・・・」と子どもたちの思いが傾いていく中、改めて授業者が問いました。

「でも、石垣さんはあえて『油断していた』という言葉を使ったんだよね。どうして、あえてこの言葉を使ったんだろうね。」

一瞬、子どもたちの声が止まりました。そして、子どもたちの目は再び、本文の「言葉」に戻って行きました。



ここがオススメ！



授業者が「あえて使ったのは？」と問うことで、子どもたちは、作者が「油断していた」という言葉を使った「表現の意図」について、改めて考え始めました。

そのためには、詩全体に目を向け、言葉と言葉を関連付けながら考える必要性が出てきます。子どもたちは、じっくりと言葉と向き合い、自分の考えを書いて行きました。その間、授業者は本当に助けを求めている子にだけ、そっと寄り添い助言します。

子どもたちが集中して「考えている」教室は、とてもしっとりと静かです。

やすらかに
美しく
油断していた。

